

**実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究
実施方法等**

1. 実践校について

実践校名	かがわだいがくきょういくがくぶ ふぞくたかまつちゅうがっこう 香川大学教育学部附属高松中学校	
学科名	生徒数	学級数
	357 人	9 クラス

2. 調査研究の対象

1・2 学年で実施（1 年＝3 クラス，118 名 2 年＝3 クラス，119 名）

3. 調査研究の実施経過

①農園活動（1 学年 4 月～9 月）

地域の方から農地を借りうけ，作物を栽培する。その収穫物を保護者や地域の方へのお接待と位置づけて，文化祭に提供し，芋煮汁としてふるまう活動を行った。

②社会科 近世の日本：産業と交通の発達（2 学年 6 月 6 時間扱い）

「なぜ，江戸時代に四国遍路をする人が増えたのだろうか。」という単元を貫く問いを設定し，四国遍路の歴史的な認識を深めた。

③創造表現活動 附中株式会社（2 学年 5 月～9 月 11 時間扱い）

「『人口減少，地方消滅』社会を生き抜く企業を設計し，起業せよ。」というパフォーマンス課題を設定し，起業計画を行う。株式のしくみを理解して資金を得る経験をするため日本証券業協会が主催する「株式学習ゲーム」に参加する。そして起業案を一般の方々にプレゼンテーションした。

④創造表現活動 身近な水環境（1 学年 10 月～1 月 11 時間扱い）

地域資源である湧水（＝以下，出水）を調査し，コミュニケーション能力の育成に向け，地元の方々に現状やあるべき未来像を提案した。

⑤創造表現活動 四国遍路と観光（3 学年 10 月～1 月 11 時間扱い）

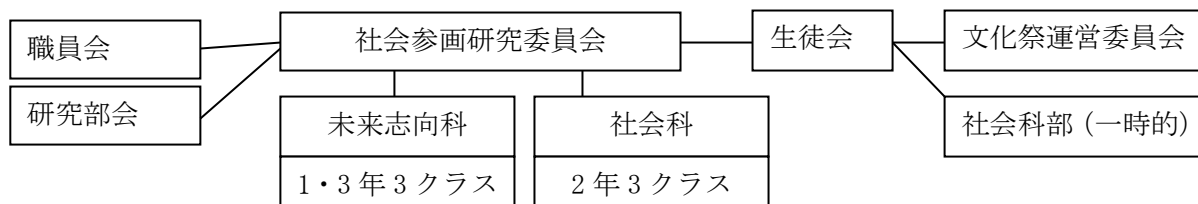
「世界遺産と日本文化との関わりは？ 国内外に発信できる地域文化の魅力は何か？」というパフォーマンス課題を設定し，四国遍路の世界遺産登録に向けてのアイデアを「PR グランプリ」で発表し，地域の文化振興に携わる方々と共に発信した。

⑥社会科 身近な地域の調査（2 学年 2 月 8 時間扱い）

「お遍路さんの移動ルートを調査し，学校周辺がお遍路さんにとって歩きやすくなるにはどうしたらよいか説得力のある提案書をつくろう」というゴールを設定し，チームを結成してこの課題に挑戦させるプロジェクト型の学習を実施した。

4. 調査研究の実施体制

下の図のように社会参画研究委員会を設置した。具体的には社会科担当教員と美術科担当教員が軸となって調査研究，実践を行った。



5. 教育委員会等として取り組んだ内容

本校の実践への，教育委員会の関わりは生じておらず，この項目については未記載とする。

6. 調査研究の評価等

本調査を実施したことによる自己評価として成果と課題を記載したい。

成果は，1 点目として，実社会との接点を重視した問題解決型学習の実践によって，社会に働きかけて社会現象が変えられるかもしれないという自己有用感が高まることがわかった。これは仮説として立てた「実社会との接点を多くもった生徒ほど自己有用感が高まる」ということを実証することとなった。2 点目として，実社会との接点を重視した問題解決型学習の実践によっても，自己肯定感や生活全般にわたる意欲を高めることはできなかった。しかし，直接地域の方々とふれあったり，お遍路さんからのお手紙をもらったりしたときに，自分への満足感が高まったことを口にする生徒が多くいた。このため数値には表れないが，地域の方々と直接かかわる経験が，自己肯定感に一時的に影響すると思われる。繰り返しそのような時間を設定していけば，数値に表れる形で自己肯定感が高まるのではないかと考えられる。3 点目として，実社会との接点を重視した問題解決型学習では単元を貫く問いのもと，生徒が一つのテーマを深く追究していくため，こだわりのある成果物やプレゼンテーションを生み出せることがわかった。また，外部の人達に見てもらおうという思いが外発的ではあるが動機づけとなって学習が促進されることも見て取れた。

課題は，1 点目として，一つ一つのプログラムが内容や資質能力でつながるよう意図したが，実際は独立した単元になってしまった感がある。実社会との接点を重視した課題解決型学習のプログラム化には課題が残った。生徒が「常に学校は社会に開かれている」と感じさせるための方策を考えていく必要がある。2 点目として，外部との調整に時間や労力が大きくかかることが課題である。しかし時間や労力については1 年目の実践より，2 年目の実践の方が格段に少なくなった。これは1 年目の文書の蓄積や，外部との連携の取り方のスキルが身についたことが大きかった。どのようにして学校全体でこの蓄積を共有し，負担感を減らしていけばよいのか考える必要がある。3 点目として，問題解決型学習としての単元モデルを複数模索する必要があると感じた。今回の実社会との接点を重視する実践のほとんどは課題について考え，提案することが最終目標になった。問題を解決し，実際に地域や社会を変化させるモデルも必要となろう。今回の実践ではそのモデルの実現化ができなかった。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

実践校名：香川大学教育学部附属高松中学校

概要

○地域の人的物的資源を活用して、先を見通し、根拠に基づいて筋道を立てて考えたり、目的に応じて判断したりする「思考力・判断力・表現力等」と他者と積極的に関わり相手意識をもって自己を表現し合意形成にいたろうとする「コミュニケーション能力」を育む学習プログラムを開発する。

学習プログラムのねらい

- 目的に応じて、様々な見方やアイデアを出す力を育成する。
- 限られた条件の中で、より適切な判断をする力を育成する。
- なぜそう判断したのか筋道を立てて理由を述べる力を育成する。
- 相手意識をもって自己を表現し合意形成にいたろうとする力を育成する。

学習プログラムの主な内容

①農園活動（新領域「創造表現活動」）※人間道德

本校が伝統的に行ってきた体験型学習で農地を借り受け作物を栽培し、料理を振る舞う。自然の恵みを受けて生きることについて体験を通して学び、栽培活動を通して自然に対する畏敬の念をもち、自然や大人達から支えられ、生かされていることに気づくことをねらいとする。

②産業の発達と四国遍路（社会科）

産業や交通の発達を四国遍路という題材を用いて授業化する。江戸時代の日本全体の動きと地域のそれとが密接につながっていることに気づかせ、地域に残る有形・無形の文化・文化財を愛着をもって受け継ごうとする態度を育てることをねらいとする。

③金融と起業（新領域「創造表現活動」）※プラム

地方創生を意図した企業を設計しプレゼンを行って模擬的に入札する。金融経済システムの効果的な活用方法と社会的起業の意味や役割を理解させ、地方創生のための起業提案において、具体的な論拠を示して判断の理由を筋道を立てて説明することをねらいとする。

④身近な水環境（新領域「創造表現活動」）※プラム

本校が研究開発指定を受けて取り組んでいる「創造表現活動」の時間に行った地域社会との接点を重視した単元である。出水の調査と保全活動を行った。出水の環境を科学的に調査しつつ、地元の方々の出水に対する思いをつないで、出水の向かうべきあり方を模索させる。地元の方々とのコミュニケーションの場を設定し、自ら話しかけたり、質問したりしてよりよいコミュニケーションの場を作り出す経験をさせる。自然の大切さに気づき、

環境を保全しようとする心構えを育成することをねらいとする。

⑤四国遍路と観光（新領域「創造表現活動」）※プラム

四国遍路巡礼を組み込んだ旅行計画を作り，発信する。四国や香川県の観光資源を見直し，お遍路体験を組み込んだ魅力ある四国巡りツアーを立案することで，地域社会の一員としての帰属意識を高め，地域活性化のための自分としての関わり方を見いだすことをねらいとする。

⑥身近な地域の調査（社会科）

身近な地域の課題と魅力を探し出し，レポートにまとめる。身近な四国遍路の調査を通して，地域の資源と課題に気づき，身近な地域社会の形成に参画していこうとする意欲や態度を育てることをねらいとする。

※人間道徳・プラムは本校が研究開発指定を受け，教科の一部，総合的な学習の時間，道徳を合わせて開発しようとしている新領域：「創造表現活動」の小領域である。